

ラテンアメリカ都市物語

＝第16回＝

赤道直下の首都キト、 知られていない魅力

板垣 克巳



キトを見渡して（写真は、特に断りのないものはすべて筆者撮影）

キトとの出会い

UNESCO 世界自然遺産であるガラパゴス諸島（1978年に認定）は有名で日本人の誰でも知っているが、「エクアドルの首都は」と聞くと、「キトですよ」と即座に答えられる人は少なく、「とても暑いんでしょう」と言われることが多い。もちろん、本誌の読者は「キトは高地で、熱帯気候ではない」と即答されると確信しているが。筆者は、1995年に出張でエクアドルを訪問し、18年ぶりに赴任のため2013年3月にキト国際空港（正式名称はマリスカル・スクレ・デ・キト国際空港）に到着した。1995年の出張の時との違いは空港の位置である。キトの国際空港は大使館から車で10分程度の距離に位置していたが、2013年2月に新空港がタバベラという近郊（キト中心部から東に車で約45分程度の距離に位置）にオープンしたばかりであった。

久しぶりに訪れた第一印象は「昼間の日差しがきつい空気の薄い首都」であった。それもそのはず、空港は標高2,400m、キト市内は標高2,850mに位置する。標高が2,850mあるということは、富士山の7合目に居住しているようなもので、酸素が平地の70%となることを意味している。勤務開始後数か月は、階段を登ったりラ・カロリーナ公園やメトロポリタン公園をジョギングすると息

が切れ、夜は眠りが浅く真夜中に何度か目が覚めるという状況に悩まされた。

政治、行政都市の性格が強いキト

キトの由来は必ずしも明確ではないが、ツァフィキ語で「世界の真ん中の土地」を意味する言葉から来たとの説が有力である。ちなみに、キトの北には、北半球と南半球が境となる赤道が通る la Mitad del Mundo（赤道記念碑）がある。

キトの歴史はプレ・インカの時代に遡ると言われる。15世紀には第11代皇帝ワイナ・カヤック（母は現在のエクアドル地域の生まれ）のインカ帝国の支配下におかれ、クスコに次ぐ第2の都市として栄えた。当時、現在のエクアドル地域は、帝国の4つの地域のうちのひとつチンチャイ・スウユ（Chinchay Suyu）の中心であった。その後、キトはスペイン人に制圧され、1534年にはサンフランシスコ・デ・キトと名付けられた（12月6日はキトの日として祭日）。現在のエクアドルに相当する地域はペルー副王領下に置かれたが、南米でのスペインからの独立の動きの下で1822年のピチンチャの戦いでアントニオ・ホセ・デ・スクレが勝利をおさめ、1830年に最終的に独立したエクアドルの首都となった。

20世紀に入りキトは、政治、文化、金融の中心として大幅に発展を遂げてきた。現在のキトは人口約270万人を超えている。

政治は、プラサ・グランデの前にどっしりと構えている大統領府（通称「カロンデレ宮殿」）を中心に行われている。以前は大統領の執務、式典等のみで使用されていたが、現在は、毎日一定時間、国民や外国人に開放されており宮殿内部を見学できる。

世界遺産の街、キト旧市街

筆者は、これまでラテンアメリカの多くの国々に居住あるいは短期滞在する機会を得たが、首都の旧市街の中でもすばらしい街並みと思われるのが、キトの旧市街であると確信する。キト旧市街は1978年、UNESCOにより世界文化遺産として認定された。

キトの旧市街はなぜ皆の心をつかむのであろうか。それは16世紀に建設が開始されたスペイン人によるコロンIAL様式の教会建築の調和の素晴らしさであろう。この時代の熱心な宗教関係者は布教の拠点として修道院、教会の建設を進めた。有名なのは、聖フランシスコ修道会により建てられた旧市街中心部に位置する聖フランシスコ教会・修道院であるが、聖ドミニコ修道会、イエズス会などがそれぞれ、サント・ドミンゴ修道院、ラ・コンパニア教会などを建設した。これらの教会は、今でもキト市民の生活にとって切っても切れないものであり



夜のラ・コンパニア教会



キトでの聖週間のプロセシオンの行進

心の寄りどころとなっている。毎年の聖週間（Semana Santa）には、旧市街がカトリック一色に染められる。スペインのセビージャのプロセシオン（行進）も有名であるが、キトの聖金曜日のプロセシオンもそれに劣らず荘厳な雰囲気醸し出し見応えのあるものである。筆者は知人の計らいでプロセシオンのルートにあたる通りの家の2階の窓からこの儀式を観察する機会を得た。「ククルチョス（cucuruchos）」と呼ばれる紫のローブと円錐形のフードをつけた市民が厳かに行進する光景（一部のククルチョスは、足に鎖をはめ、身長2倍もあると思われる十字架を担ぎ引きずり歩く）は、まさに映画でキリストが十字架を担いでゴルゴタの丘に向かうシーンと重なるものを感じたものである。信心深い年配の市民のみならず、普段は宗教などまったく関心を持たないと思われるような若者も多く参加している姿は印象的であった。ちなみに、2015年7月にフランシスコ教皇（イエズス会）がエクアドルを訪問した際には、旧市街の中心部の大聖堂を訪れるとともに、ピセンテナリオ公園（旧キト国際空港）にて市民向けのミサを催している。

豊かな自然に囲まれているキト

エクアドルの観光省や外務省の方々によれば、エクアドルの魅力は、シエラ（山岳地帯）、コスタ（海岸地帯）、オリエンテ（アマゾン地帯）、ガラバゴス諸島という「4つの世界」がコンパクトにまとまっているところにあるという。シエラに位置するキトは、東をグアプロ渓谷に、西をピチンチャ火山（Volcan Pichincha）に挟まれているために南北に長い発展を遂げてきた。このピチンチャ火山は1999年7月に噴火し、キト市内にも火山灰が降った。最近では火山活動もなく、テレフェリコ（ロープウェイ）により手前の駅（標高3,117m）から20分程度で終点のクルス・ロマ駅（標高3,947m）に到着することができる。駅横の展望台からのキト市の遠景は、まさに絶景である。この駅から火山の頂上（標高4,794m）を目指して駆け



キト周辺で見ることができるハチドリ（提供：Juan Carlos Rios氏）

昇る猛者もいる。

一方、Distrito Metropolitano de Quito (キト首都圏) は、やや北西に伸びており、生物多様性の豊かな森林群 (この地域は 2018 年に UNESCO の生物圏保存地域 チョコ・アンディーノとして指定) が広がっている。キト中心部から 3 時間ほど (120km) 車を走らせると、パクト地方教区のマシピ・ロッジに到着。1300h の敷地の中に民間資本が環境に配慮して建てたロッジで、ナショナル・ジオグラフィック誌でも「世界のユニークなロッジ」の一つとして紹介され、世界の自然愛好家によく知られているスポットである。キトの喧騒から逃れてリラックスし、地元ガイドの案内の下で森林の中でさわやかな空気を吸い、色鮮やかな野鳥を観察して歩くことにより心身をリフレッシュすることができる。

一方、50km 南に下ると車で 1 時間ほどでコトパクシ火山 (Volcan Cotopaxi、標高 5,897m。姿や形、積雪は日本の富士山と瓜二つ) を目の前に眺められるホテル (ホテル・コトパクシブゴ) に着く。この一帯は、一面鮮やかな牧草に覆われている起伏のある高原地帯 (標高約 3,000m) で、牧畜 (乳牛、肉牛) を営む酪農家が多い。富士山にも決して劣らず調和の取れた雄大なコトパクシ火山の頂上まで登るのは大変であるが、ホテルから、時間の経過にともない太陽の光、雲の動きにより山の風景が刻々と変化していく様子を眺めることは、体力を必要としないで老若男女皆楽しめる。富士山と同じく何度眺めても飽きない。

日本との関係

エクアドルと日本の外交関係は 1918 年に樹立された。黄熱病撲滅で有名な野口英世博士がロックフェラー財団のミッションの一員としてエクアドルのグアヤキルを訪問したのも同じ年であった。2018 年はこの意味で二重の 100 周年。2018 年を祝うため日本、エクアドル両国に 100 周年実行委員会が発足し、両国それぞれで各種記念

イベントが行われた (エクアドルにおける実行委員長は、近年、日本で好評を博している田邊バナナで有名な田邊正裕氏。田邊委員長、本当にお疲れ様でした)。エクアドルにおける日本人は 350 人余りであるが、その多くの方々、そして政治や経済、文化スポーツの面で関係し日本をこよなく愛する多くのエクアドル人に支えられ、100 周年に関連する各種イベント (海上自衛隊練習艦隊のエクアドル訪問、日エクアドル商工会議所発足、ラ・カロリーナ公園の植物園内に造られた日本庭園、野口英世展示会、シンガーソングライターのさだまさしも参加したキト日本祭、河野外務大臣 (当時) のエクアドル訪問、記念切手の発行、モレノ・エクアドル大統領の訪日、日エクアドル租税条約の署名 (2018 年)・発効 (2019 年) など) が盛大に行われ、両国の強い友好の絆が確認され、次の 100 年に向けての熱い思いが皆の心に残った。

変化しつつあるキト、キトの将来

キト首都圏の中核的地域 (parroquias urbanas (都市小教区) と呼ばれる地域) は南北に長く西をピチンチャ火山に、東をグアプロ渓谷に挟まれた幅が 5km、長さ 20km の地域では、通勤時間帯や雨天の日には交通渋滞が激しく年々悪化する傾向にあった。路線バスが市民の移動を支えていたが、これをある程度効率的に行うとの発想で連結バスを専用レーンに走らせる方法をとった。まず、1995 年にジャヤミール・マワット市長の下で運行を開始した東西の中間線を走るトロリーバスである。これを補完する形で 2001 年に東寄りにロケ・セビージャ市長の下でエコビアが運行開始、2005 年には西側寄りにパコ・モンカヨ市長の下でメトロバスが運行開始された。これでも交通渋滞は解決されることはなく、他のラテンアメリカの首都と同様にさらなる大量輸送手段が必要とされ、長い議論の末、地下鉄の建設オプションがとられることとなった。アウグスト・バレラ市長の下で、南北に総延長 22km の地下鉄建設に関する入札が 2010



雄大なコトパクシ火山



ラ・カロリーナ公園の中に建設された「日本庭園」(提供: Álvaro Samaniego 氏)

年に行われ、2012年12月には駅舎建設が開始、2013年には地下鉄路線自体の工事が開始された。建設コスト(約20億米ドル)は、中央政府とキト市で分担し、世界銀行、米州開発銀行、アンデス開発公社などが支援をした。その後、マウリシオ・ロダス市長、現在のホルヘ・ユンダ市長下でも工事は継続され、2021年2月頃に完了見込みであり、約37万人/日の輸送を見込んでいる。長年バス通勤に慣れてきたキト市民の生活形態にどのように影響を与えるか興味深いものがある。

キトの将来はどうなるのであろうか。キトは、市長が変わるたびに新たなビジョンが示され必ずしも一貫的な方向性が見られないが(モンカヨ市長の「プラン・キト21世紀」、パレラ市長の「グリーン都市ネットワーク」やロダス市長の「ビジョン2040」)、BiciQuito(自転車シェアリング)、Ciclovia(自転車専用レーン)延長、環境負荷の小さい車両へ市バスの買い替え促進や公園、広場の緑化・植林推進などの取り組みが取られてきており、人間にとって住みやすく、より環境にやさしい都市への変革に向かっている傾向がみられる。

サンフランシスコ大学のマリア・イサベル・パス建築学部教授は、2150年のキトについて次のように語っている。パス教授の描く未来は多くのキト市民の期待する夢であろう。

- ・キト地下鉄の北への延長(カルデロン地区への5km延長)

- ・アエロ・メトロ(ロープウェー。キト市ラ・カロリーナ公園付近から(峡谷を越え)クンバヤ地区やキト国際空港を結ぶ)建設
- ・キト国際空港周辺(タバベラ地区)における経済開発特区建設
- ・キト周辺のマチャンガラ川などの浄化
- ・キト市内のごみの分別回収徹底、リサイクル推進、プラスチック袋使用削減

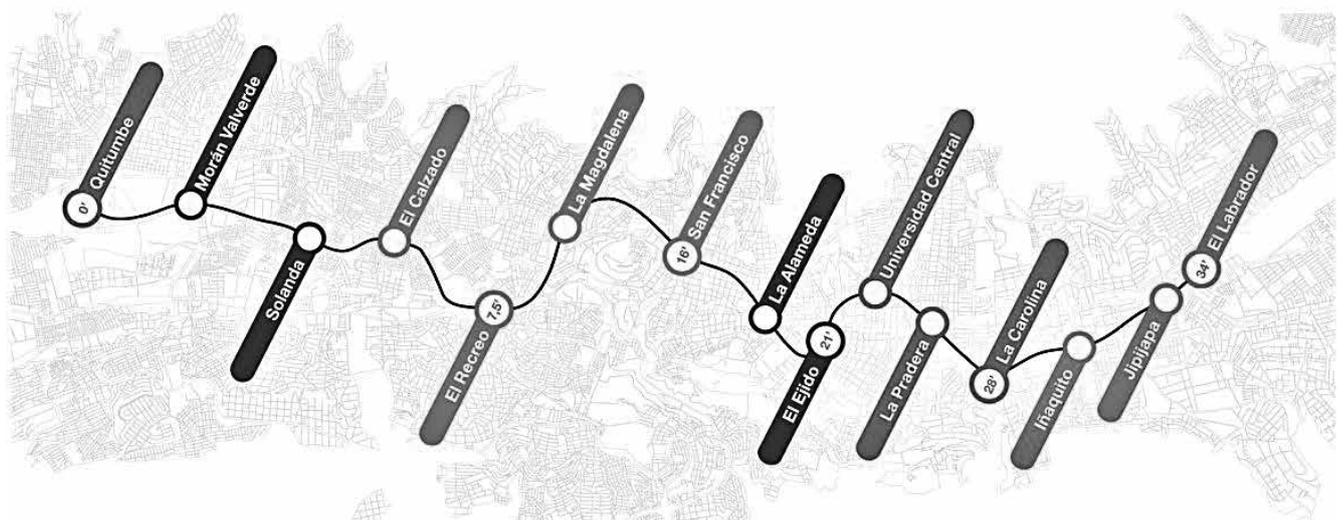
キト市民の気質について本稿では取り上げてこなかったが、5年間この街に居住した者としての個人的な意見ではあるが「やや保守的で何事にも慎重、まじめで素朴」との印象がある(ライバルのグアヤキル市民の気質は「明るく、話し好きで、即断即決型で商売上手」との印象あり)。

他のラテンアメリカの首都と比し、地味なところもあるが、魅力も多いキト。是非とも、ガラパゴス諸島のみならず、キトも訪れて頂きたい。筆者は5年後、10年後、20年後に再びキトを訪れ、その発展を自分の目で確かめ、友人と再会しワインを酌み交わしたいと願っている。

(本稿は、個人の見解であって、外務省及び在エクアドル日本国大使館の見解を述べたものではない。)

(いたがき かつみ 在レオン日本国総領事。前外務省国際協力局開発協力企画室長、元在エクアドル日本国大使館公使参事官)

PRIMERA LÍNEA DEL METRO DE QUITO



METRO
キト市地下鉄路線図(キト市ホームページより)

